



2026年度

The Japan School of Doha

ドーハ日本人学校

教育目標（2024～2026中期教育目標）

生きてはたらく学力（知）・日本の文化を大切にする心（徳）・

健康でたくましい体（体）・世界を見つめる視野（開）をもった児童生徒の育成

I はじめに

現在、文部科学省の教育施策の中で進められているソサイアティー5.0、令和の日本型教育の推進、教員の働き方改革など待たなしの改革が進められています。これらの取組については、国際化された様々な課題に対応できるグローバル人材の育成に焦点が当てられています。ソサイアティー5.0は、デジタル社会を見据えた新しい技術や価値を生み出す人材育成、令和の日本型教育の推進は、知・徳・体を一体として育む日本型教育の充実による主体性のある人間形成、その中では個別最適な学びと協同的な学びを具体的な手立てとしています。

また、令和4年6月には、「こども基本法」が成立し、改めて児童・生徒の権利について人権尊重という観点で定義されました。これを受け、文部科学省も生徒指導提要进行を12年ぶりに改訂し、「個」に寄り添った指導の在り方について定義をしています。

その方向性については、次のことが掲げられています。

「積極的な生徒指導」の充実

児童生徒の問題行動等の発生を未然に防止するため、目前の問題に対応するといった課題解決的な指導だけではなく、「成長を促す指導」等の「積極的な生徒指導」を充実させる。

個別の重要課題を取り巻く関連法規等の変化の反映

個別課題（いじめ、不登校、児童虐待、自殺、多様な背景を持つ児童生徒への対応等）について、平成22年の生徒指導提要进行作成時からの社会環境の変化（法制度、児童生徒を取り巻く環境）やそれらに応じた必要な対応等について反映する。

新学習指導要領やチーム学校等の考え方の反映

生徒指導全般に係る事項として、全体を通して、生徒（児童）の発達の支援、チーム学校、学校における働き方改革、多様な背景（障害や健康、家庭的背景等）を持つ児童生徒への生徒指導等について反映する。

また、生徒指導提要进行に示されている内容は、次のようになります。

- いじめ ○暴力行為 ○少年非行（喫煙、飲酒、薬物乱用を含む） ○児童虐待
- 自殺 ○中途退学 ○不登校 ○インターネット・携帯電話に関わる問題
- 性に関する課題
- 多様な背景を持つ児童生徒への生徒指導

※児童生徒の障害や健康問題等の個人的背景や家庭的背景

つまり、これらの内容は、児童生徒本人が社会の中で自分らしく生きることができる存在へと成長させる過程を支えるために必要な視点を示しています。そのために、児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長により、社会的な資質・能力の発達を支えていくと同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えていくことが重要となります。この目的を達成するために、児

児童生徒一人一人が自己指導能力（深い自己理解に基づき、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択、設定して、目標達成のため、自発的、自律的かつ他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を判断し、実行する力）を身に付けることが大切とされています。

その具体的な手立ては、次のようなことが挙げられています。

<p>自己存在感の感受</p> <p>集団に個が埋没しないよう<u>自己存在感等を実感</u>できるよう工夫</p> <p>共感的な人間関係の育成</p> <p>支持的で創造的な<u>学級・ホームルームづくり</u></p> <p>自己決定の場の提供</p> <p>主体的・対話的で深い学びの実現に向けた<u>授業改善</u></p> <p>安全・安心な風土の醸成</p> <p>児童生徒による<u>安心して学校生活を送れる</u>ような風土づくりを支援</p>

II 学校経営の基本理念

- 一人一人の子どもが、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となるための「生きる力」を育む。
- 様々な家庭、様々な成育歴といった子どもたちの育つ背景にも目を向けながら、一人一人がもつ様々な可能性の伸長を目指し、温かい支援、きめ細かな指導、正しい評価や励ましのある、子どもに寄り添った教育活動を実践する。
- 子ども理解を中心とした研修・研究で、教職員の人間力・指導力・実践力を高め、保護者や地域から信頼される学校を創造する。

III 学校の教育目標



日本の文化を大切に する心（徳）	生きてはたらく学力 世界を見つめる視野	健康でたくましい体	信頼される学校づくり
<ul style="list-style-type: none"> ○日本文化の発信拠点 ～伝統文化の体験 ～和太鼓の継続 ○小規模校の特性を生かした人間関係の形成 ～協働的な学習の充実 ～日常的な交流活動 ○他者を思いやる心の育成 ～3つの「あ」 あいさつ、ありがとう あんしん 	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎・基本の充実と学力の向上 ～漢字・計算の徹底 ～応用力の育成 ～英語検定目標の設定と英会話の充実 ～宿題・自主学習の充実 ○「サバハナ」活動の継続 ～3か年計画2年目花博への取り組み ○協働的な学びの工夫 ～少人数を生かした取組 	<ul style="list-style-type: none"> ○体力向上を図る学校生活と行事の工夫 ～計画的な指導の工夫 ～朝や休み時間の活用 ○健康観察と家庭との連携・協力 ～アレルギー、疾病、怪我等の情報共有 ○安全管理、安全教育の組織的・計画的な運用 	<ul style="list-style-type: none"> ○危機管理、早期発見・対応、保護者との連携強化 ～電話等による丁寧な連絡 ～懇談会等の充実 ○学校からの情報発信 ～各種だより・HP等の充実 ～更新頻度の向上 ○学校評価の工夫改善 ～目標の明確化 ～改善点の明確化 ○保護者のニーズに答えられる学校

IV 推進の重点目標

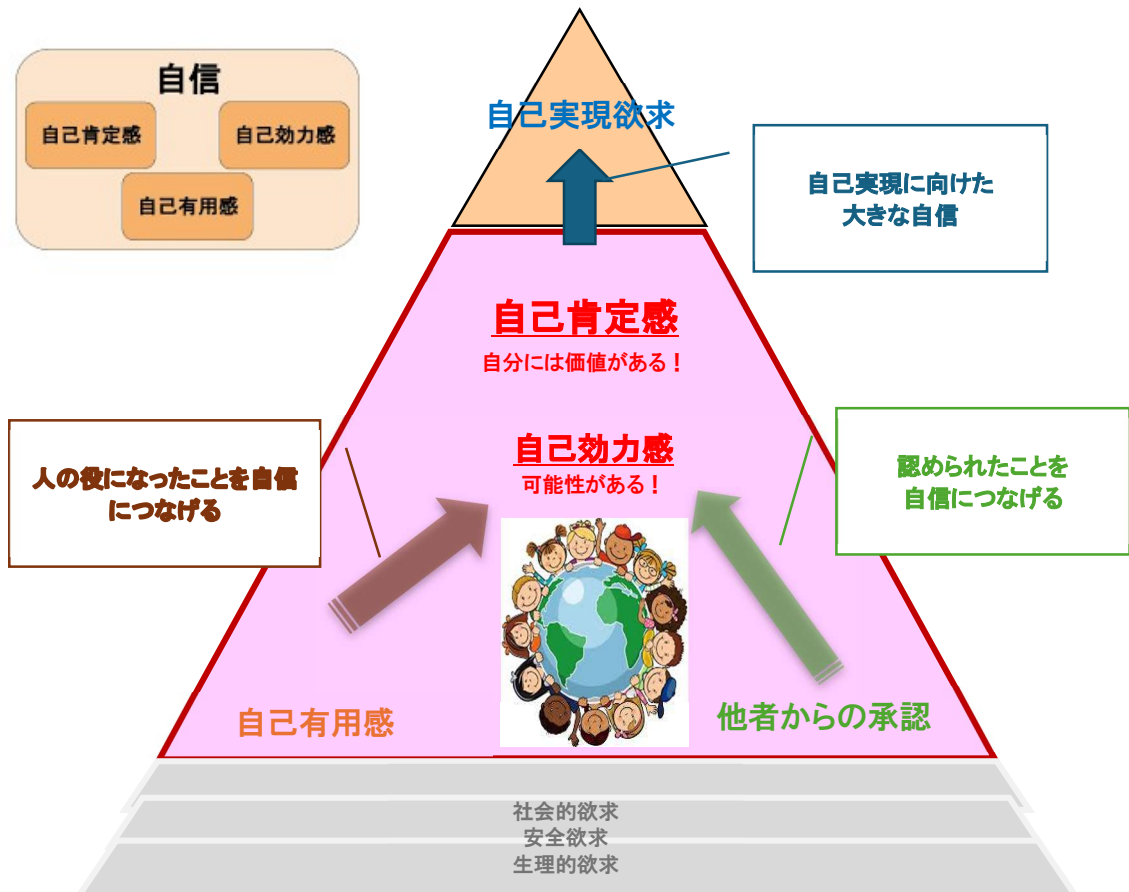
「**自他を尊重し、主体的に考え、行動する子ども**」（目指す子ども像）
～「**いい声（言葉） いい顔（笑顔） いい姿（行動）**」**笑顔あふれる学校**～

平成19年度に開校（2度目の開校）した当時の学校教育目標は、「確かな学力と豊かな心を身に付けた 祖国に誇りを持ち、世界に貢献できる たくましい子どもの育成」でした。ドーハ日本人学校が目指している子どもは、「たくましい子」です。そのたくましきとは、しっかりとした学力を身に付けること、自他を含め、様々な物・事を大切にする心を身に付けること、その身に付いた力と自国に誇りをもってグローバル社会の中で活躍できる素地をもっていることです。つまり、自分なりの目標を持ち、前向きに取り組むことで、ぐんぐん成長していく子どもの姿がイメージされます。この子ども像の達成のためには、自己有用感や自己肯定感を育み、自分の可能性や良さに気付き、自信をもって取り組んでいく姿勢が大切です。そのような姿が開校当初から受け継がれている子ども像です。

その子ども像の具体的な姿として、**今年度は3つの「い」という言葉で表現**しています。

これは、子どもたちの学校生活が3つの学期で区切られていることから、それぞれの学期ごとに子ども自身が具体的な目標や姿を意識できるようにしています。また、各学年、各部においても、この重点目標を意識し、これまでの取組を見直し、新たな取組の推進に努めてほしいと考えています。

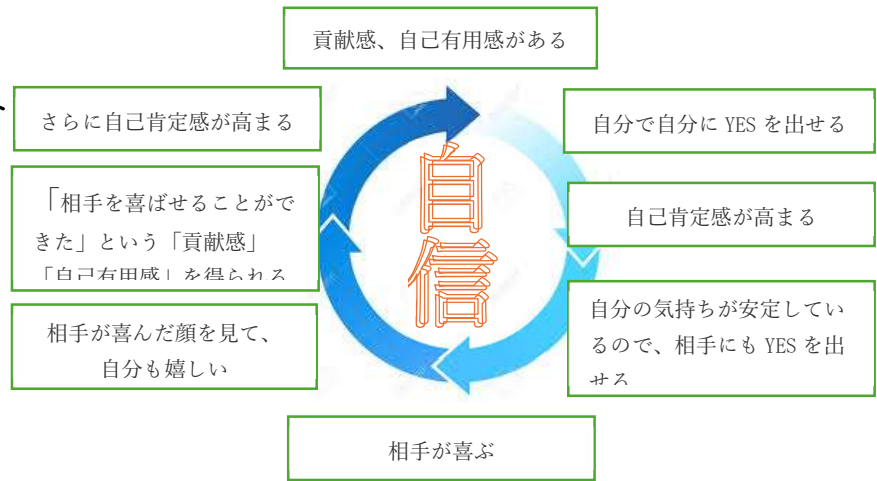
また、このような子どもの姿を目指すために、昨年度も人間尊重の教育を受け、教育活動の柱を「自己有用感を意識した取組」として推進してきました。その方向性は変わりませんが、下に図に示すように児童生徒が主体的になるためには「自信」がキーワードとなります。その自信をもたせる過程として、「**自己有用感**」→「**自己効力感・肯定感**」→**自己実現欲求**へつなげていきます。



自己有用感から自己肯定感へ

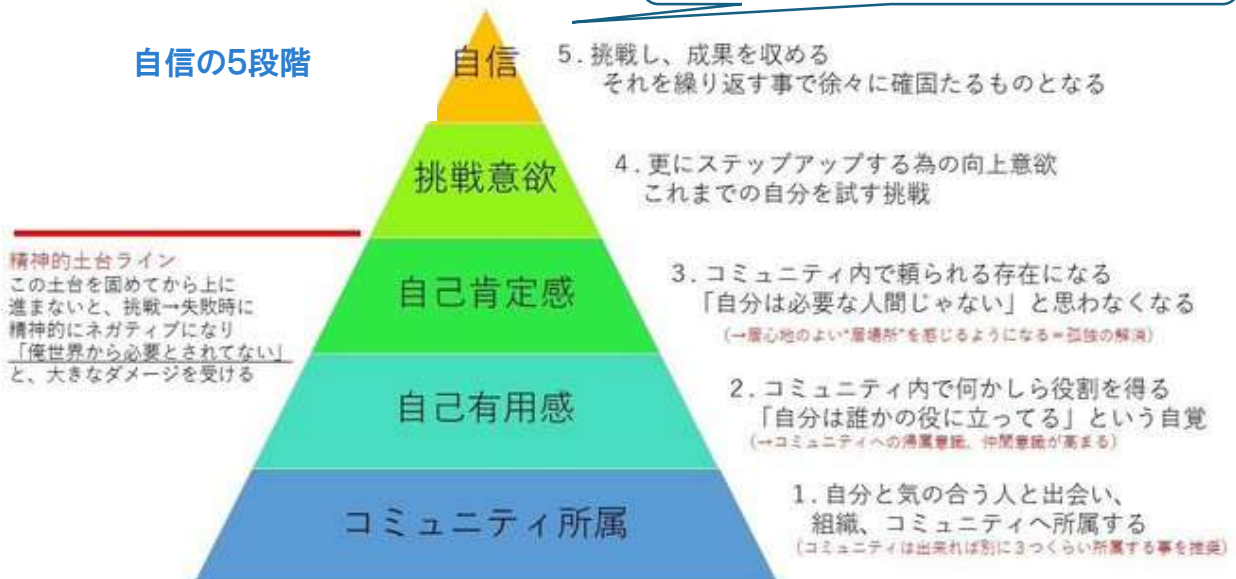
自己肯定感が高い人は、精神的に安定しているため、突然の災難や困難、逆境にあっても「自分なら大丈夫」「自分ならできる」という感覚をもつことができます。このような気持ちになること

で、冷静な気持ちで困難を乗り越えることができます。ありのままの自分を認める、ありのままの他者を認める、自己有用感をもつことが自己肯定感を高めることにつながっていき、自分自身を信ずることができる「自信」となります。



関係性を表す図

自信の5段階



【自己肯定感を高めるために】

- 自分のことを認められる
 - ①安心感…自分は守られている、愛されている
 - ②成功体験…小さなチャレンジを積み重ね
 - ③コミュニケーション…他者承認、自己承認の認識
 - ④自分の良さ…好きなこと、得意なことがある
 - ⑤目標や目的…「こういうことをやりたい！」が原動力

【自己肯定感とは】

「他人と共にありながら自分は自分であって大丈夫だ」という、他者に対する信頼と自分に対する信頼

- ① 自らの在り方を積極的に評価できる感情
- ② 自らの価値や存在意義を肯定できる感情